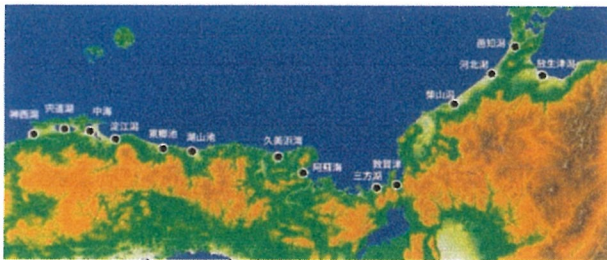


日本海潟湖（ラグーン）の食文化

郷土料理研究家
経澤信弘

はじめに

北陸から山陰地方にかけての日本海側では、潟湖と呼ばれる特徴的な地形が良くみられる。それは、日本海文化の特徴である。



(北陸地方から山陰地方にかけての潟湖)

縄文時代は、現在よりも数kmも内陸側に海の汀線が広がり、内潟が形成された。潟湖は、強い季節風や河川の土砂の堆積作用により形成される砂州や砂丘により、その溝口が閉塞されたものだ。潮汐差の少ない日本海側に形成されやすい。富山「放生津潟」のように現在では、平野の地下に埋没されたモノもあるが、福井「三方湖」や鳥取「宍道湖」などのように湖山池として大きな水域としての姿をとどめている潟湖も多い。

また、青森十三湊から九州唐津まで港として利用できる潟や湖が多数あり、富山県には放生津潟や十二町潟がある。

潟や湖には様々な生き物が生息している。縄文時代・弥生時代から、季節風が強く波の高い日本海では、直接海に面する場所には生息し難く、波の穏やかな浅い水深の潟湖は、天然の良港であり、漁労や採取活動の格好の場所となった。生活や文化の残る遺跡のある場所でもある。

その潟湖周辺の食文化はどのようなモノかを北陸を中心に考えてみた。

1. 新潟県・福島潟



▲豊かな自然に囲まれ季節ごとの花が咲く



(福島湖)

新潟は潟食の宝庫である。

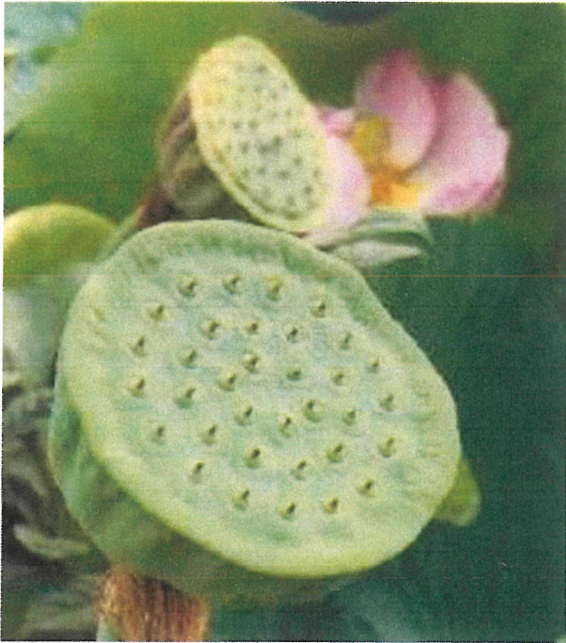
古代・中世は、多くの潟湖が存在する低湿地的な土地であり、舟農業と呼ばれる土地柄にあった農業とともに、漁労や採取、狩猟などが、湿地と潟の環境を活かした営みを積み重ねてきた。江戸時代から昭和初期まで干拓事業が進められてきた。

福島潟は、旧豊栄市に位置し新潟で一番広い潟（163ha）である。220種以上の渡り鳥飛来地（国指定鳥獣保護区）に指定され多くの水性・湿性植の450種以上が確認されている。環境省「日本重要湿地500」選定。

蓮の実は、お盆が過ぎた頃の子供の「おやつ」であり、皮を剥きそのまま食べる。シャキシャキした食感である。

蓮の実は、「オニヒシ」と呼ばれ、水草の実で硬いトゲがあるの特徴である。食感は栗やゆり根に近くホクホクしている。炊き込みご飯や炒め物に使う。

福島潟で潟漁師の新潟市在住の倉島百合子さんより、わざわざ送っていただいた。



(蓮の実)



(菱の実)

2. 富山県・放生津潟



縄文時代前期の潟湖と貝塚

(射水平野と放生津潟)

奈良時代「万葉集」で奈呉の江（浦）と詠まれた潟湖で1.7k m²ある。縄文時代の小竹貝塚遺跡につながる射水平野を形成され、別名「越の潟」とも言われ、下条川、堀川などの小河川の土砂の堆積で縮小された。

明和6年、湖心に20間四方の人口島を造成（弁天島）、水神の海龍神が祀っている。

「水門風 寒く吹くらし 奈呉の江に
夫婦呼びかわし 鶴さはに鳴く」

(万葉集巻17・4018)



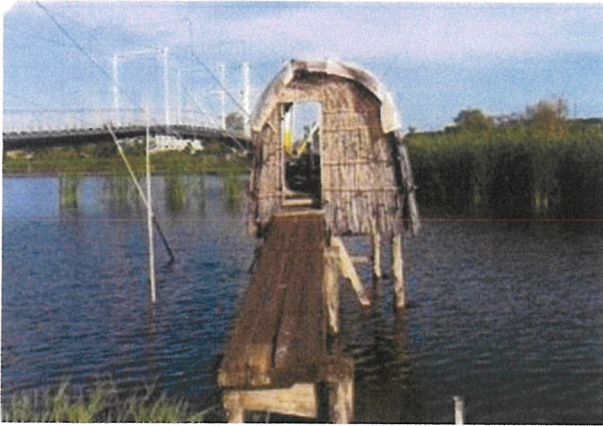
(放生津潟一越の潟)



(放生津潟の絵図-弁天島)

富山新港は、昭和61年に国から特定重要港湾に指定された。法的な位置付けは「港湾法」において国際海上貨物輸送網の拠点の国内18港の一つとして定め、国土交通省は平成23年11月日本海側拠点港に指定した。更に日本海側港湾をリードする「総合的拠点港（5港）」選定される。本来の潟の姿から改造されたといえ、なお潟の形をとどめているのは少ない。昭和時代は汽水湖で「シジミ」の産地であった。残念ながら、漁は確認できなかった。

3. 富山県・氷見十二町瀉



(十二町瀉-布勢の海)



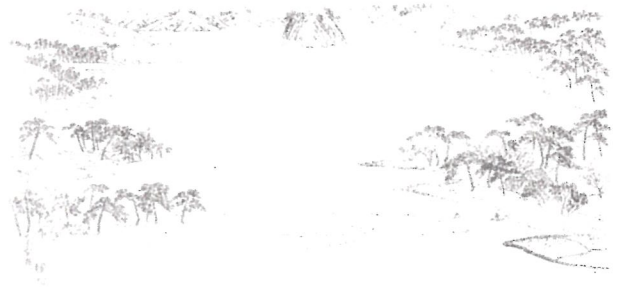
(十二町瀉のオニバス)



圖 定 想 海 水 勢 布

(布勢の海想定図)

十二町瀉は、奈良時代『万葉集』に布勢の海と詠まれた瀉湖である。布勢の海は砂丘で湖を形成され、東端で有磯海につながる。



(布勢の海八勝図)

瀉湖周辺に、朝日長山古墳、桜谷古墳群、柳田古墳遺跡などがあり、弥生時代古墳時代に地域の有力な経済活動していた海人集団の活動があったことを物語っている。

布勢の海は、縄文中期頃より、砂丘の発達で少しずつ形成され、縄文後期には淡水化した。しかし、明治時代以降、数度の干拓事業により、今日では、すっかり平地化した。

松尾芭蕉が『奥の細道』で詠んだ

「わせの香や 分入右は 有磯海」

大伴家持が布勢の海での遊覧の歌

「布勢の海の 沖つ白波 あり通い

いや年のはに 見つつしのはむ」

(万葉集卷 17 3992)

4. 石川県・内灘河北瀉



(河北瀉)

河北瀉は、古くは、蓮湖、大清湖と呼ばれ、瀉周辺 70 k²である。内灘砂丘で堰き止められてできた海跡湖で、住民が漁業権を手放すまで、半農半漁の生活を営んできた汽

水湖であった。



(河北潟水門)

河北潟は、昭和38年(1963年)から開始された河北潟干拓工事で干拓と埋立ての事業が行われ、汽水湖と淡水湖を分ける水門が作られた。

河北潟では、鮒(ふな)、鯉(こい)、雷魚(らいぎょ)、鯰(なまず)、鰻(うなぎ)、鮓(ごり)、鱒(ぼら)など、多様な魚介類が採れたという。漁法はフクロ漁法やゲス漁法などがあつた。

宮坂村の郷土史家辺本さんは「今は、漁師がいなくなった」と言われる。

「内灘町歴史民俗資料館一風と砂の館」に貴重な資料が展示されている。

5. 石川県・羽咋市邑知潟



(邑知潟全景)

邑知地溝帯の南端部は史跡吉崎・次場(よしざきすば)遺跡で約8haの弥生集落跡の低湿地である

邑知潟は、昭和42年の国営干拓事業により、四分之三が埋め立てられ農地に転換されたが、海水と淡水の両方の魚種が生息し量も豊富であつたようである。

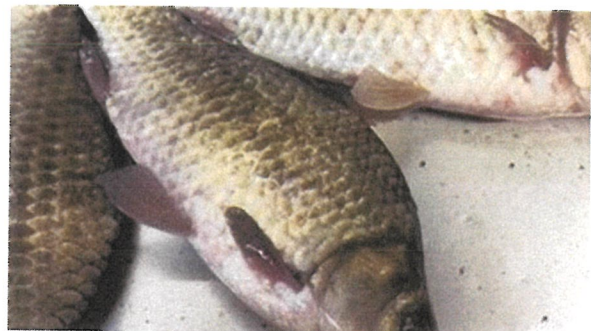
邑知潟などで使用された漁具は、「羽咋市歴史民俗資料館」に収蔵されている。

邑知潟では、冬の風物詩として有名な投網による寒鮒漁12月から2月まで行われる。

川魚漁師の村さんは「風が弱い晴れた日」を選んで出漁するという。



(寒鮒漁)



(寒鮒)

ここでは、全国でも珍しい、寒鮒の刺身が味わえる。丸々として脂がのり、「あらゐ」にして生姜醤油でいただく。



(寒鮒刺身)

6. 石川県・小松加賀三湖

石川県南西部の能美丘陵と江沼台地の間に存在する「柴山潟」と「木場潟」、そして今は干拓され、農地になっている「今江潟」の三潟を総称して「加賀三湖」と呼んでいる。

今江潟は干拓されて低地化された。かつては大和蜆の産地であった。



(木場潟—絶景の道)



(木場潟)

木場潟は、唯一、干拓されなかったため、自然の姿をとどめている。そのため、「美しい日本の歩きたくなる道」や「新日本歩く道紀行100選—絶景の道」に認定されている。木場潟は、多くの水性植物が生息している。しかし、江戸時代初頭から舟で潟泥を運び「泥汲み」と呼ばれる作業で耕地を広げてきた。

ここでも残念ながら、漁は行われてない。資料館に、昭和初期の漁具が展示している。又、木場潟に蓮如伝説が残っている。



(資料館の漁労展示)

7. 石川県・柴山潟



(柴山潟)

柴山潟は加賀三湖の中で最も大きな面積を誇る。干拓率は68%である。

柴山潟は、漁が盛んで漁業協同組合理事の池端さんに色々な話を聞くことができた。

池端さんは、自ら料理屋を営んでおられ、鯉料理や鮎料理を提供している。

小鮎は甘辛く「甘露煮」に、鯉は「刺身」として、素朴な味わいで伝統料理を継承しておられる。

近くに片山津温泉があるので、多くの観光客が食べに来られるという。



(池端さん)

8. 福井県・北潟湖



(北方湖周辺地図)



(北方湖)

北潟湖は、三方五湖に次いで福井県で三番目に大きい。本流2級河川大聖寺川本流に直接合流し、河口の塩屋漁港で日本海につながっている。水位差があまりないため海水が流れ込みやすく絶好の汽水域になっている。又、貿易湖としても有利であった。

江戸時代は、「カキ養殖」が盛んにおこなわれていたが、19世紀後半から始まった新田開発により、徐々に淡水化していった。ここは、「ウナギ漁」が盛んにおこなわれている。

葭の原が繁茂拡大され、渡り鳥が多く飛来している。鳥類は、カルガモ、マガモ、アオサギなどが生息している。

あわら市の北潟公民館長北浦さんは「子供のころは多くの漁師がいた」と言っている。

又、潟を見下ろす形で浄土真宗の北陸の拠点「吉崎御坊」がある。貿易の拠点として蓮如が塩屋の港に目を付けたに相違ない。



(吉崎御坊と北方湖を見下ろす蓮如像)

9. まとめ

日本海側の特徴として潟を挙げたが、食に関する研究は少ないように思える。

潟周辺の低湿地に米作りが始まったとされる二千年前から排水との闘いであった。日本海特有の冬の北西の風が、吹き荒れる河口には、大量の砂が堆積し行き場を失った水が流れて、湖化することが度々あった。

今後の課題は、青森から九州の潟の生き物や食文化を調査し、人々の食生活を見てみたい。